発言者	発言内容
啓　発	
委　員	○図書館フォーラムの内容はよかったが、一般の参加者が少なかった。 ○私自身もサイエンス・カフェの委託事業にも関わった。かなり広く参加を呼びかけたが、参加者が少なかった。広報の難しさを実感した。 ○もう一つの委託事業で取り組んだ大人のビブリオバトルについては、私自身も知らなかった。アンテナを張っているつもりでも知らない事業がある。新聞掲載など広報の仕方を見直した方がよい。
委員長	○広報はどのくらい行ったのか。図書館とかホームページ、教育広報番組の活用はあったのか。
事務局	○ホームページやフェイスブック、教育広報番組でのお知らせ等、いろんな広報手段を使ってＰＲをしてきた。伝わっていないということは、広報が十分ではない部分もあったと感じている。
委　員	○大人のビブリオバトルを実施している団体は、フェイスブックで広報していた。広報を見て、元気にがんばっていると感じた。フェイスブックは、低予算で広報できる。いろんな媒体を使うことが必要である。
委　員	○広報することは大切である。 ○これだけたくさんの事業をやっていることはすごいことであるが、学校、図書館、生涯学習課など、それぞれがバラバラで取り組んでいる感じがする。もう少し系統立てて、連携した取組になるとよい。それぞれがみんなで力や心を合わせ、一つのものをみんなでつくれるとよい。そうなると、人も出せるし、広報もできる。最近はハイブリッドという言葉を使うが、「地域×図書館」、「学校×地域」など、かけ算して図書館が関わっていくような連携した取組を推進していきたいと考えている。 ○１１月は市町村も読書月間、読書週間を行い、地域を巻き込めないかと考えて取り組んでいる。県の取組も１０月、１１月が多い。行きたいと思っていても自分のところで行事を抱えていると、動けない。地域ごとに行事を分散するなど、工夫ができないだろうか。
委　員	○ターゲットが県民であれば、対象が幅広いので、ホームページやツイッターを活用した方がよい。また、みやざき犬を広報大使として参加させてみてはどうか。 ○図書館フォーラムには市町村立図書館職員も参加したいと思っている。日程をうまく調整して、必ず公共図書館職員が参加できるようにし、さらに県民がそこに参加できるようにすればよいのではないか。

委　員	○参加したいものもあったが、行事が重なって参加できないことがあった。できれば年間スケジュールの一覧があるとよいのではないか。 ○「大切なあなたへ送る　私の一冊」は、どんな作品を応募したか知ることができるブックリストなどがあるとよい。ブックリストがあれば、学校の先生は選書にも生かせるのではないか。
委員長	○図書館フォーラムは極めて質の高いものだった。 ○大学ではフォーラムを毎年４～５回実施しているが、参加者は、１００名を上限としている。それ以上増えると運営が大変で、プログラムの質が落ちる。 ○図書館フォーラムは実践発表が２つもあった。現状を変えようとしている図書館、人材を輩出していること自体が成果である。そこをもっと取り上げてもいいのではないか。まとめを新聞社の方に頼むと、記事を書いてもらえたかもしれない。そういった大きなメディア媒体が参加できる仕組みづくりができるとおもしろい。 ○サイエンス・カフェや高校生のビブリオバトルは、読書活動の啓発に大きな役割を果たしている。参加人数だけが成果ではないと考える。例えば、ホームルーム活動で行ったビブリオバトルに参加する学級や生徒も、広い意味では参加者数といえる。事業の成果は、この活動の広がりがどれくらいかということではかれるものもある。 ○啓発事業では、参加人数の増加をねらう必要はないのではないか。もし、人数が欲しいのなら、県民の子育てフェスタは１２００～１４００名の参加がある。大型商業施設も集客力がある。たくさんの人数が集まる場にこちらから参入することも考えられる。 ○人数をある程度制限し、質を担保する事業と、とにかく参加者数を増やす事業と分けた方がいいのではないか。
人材育成	
委　員	○現物選書は、書店商業組合、本を取り次ぐ会社が関わって実施している。２～３年前から開催しているが、司書や学校の先生からも好評であるため、今後も継続していけるとよい。
委　員	○学校現場では、読書活動推進、図書館の活用などの理解が得られていないところがある。学校図書館担当者が一生懸命やりたくても二の足を踏んでしまうこともある。学校によって温度差があるという意見もある。 ○学校図書館の研修については、研修の対象が誰で、いつ、どのレベルまでやるのかを考えることが必要である。教員養成から研修を行い、ノウハウを学ぶことが必要ではないか。 ○学校図書館を活用した調べ学習のノウハウの知識をもっている教員は少ない。やったことがないから自信がない先生が多い。読書活動推進を含め、先生方のメディアリテラシーを高めることも重要だと感じている。そういったものを含めた研修計画ができるとよい。

委　員	○ヤングアダルトサービス研修に参加できなかった中学校の先生がいて、とても残念だった。会場の収容人数の関係もあるが、読書活動推進事業に関わっている先生方には、案内してあげてもよかったのではないか。今後、配慮してもらいたい。
委　員	○年間を通して、よい研修をしてもらっている。市町村公共図書館職員も学びたいことにポイントを絞り、よい学びができている。 ○障がい者サービス研修を学んだ当館の職員が、「障がい者サービスマニュアル」を作成したいと言っていた。研修をとおしてサービス向上の機運が高まり、よい研修を受講できたのだなと感じている。 ○人材育成事業は今後もぜひ続けて欲しい。県が行う研修では、いろんな方の話が聞けるので職員も刺激を受けている。ひいては市民や県民のためになる。
委員長	○今年度から、宮崎大学が実施する教員研修として、教科・領域を横断する教育実践の展開の中に、読書推進と図書館教育を入れた。大学における教員養成では、図書館教育というのは少なく、今後も科目を増やすことは難しい。学生は大量にレポートを書くために本を読んでいるが、読む本が系統的になっていない。年間どれくらい、何をどう読ませるかを考えて読書活動推進ができる人材になっていくようなカリキュラムを考えている。 ○事業の中に、図書館への運営助言のための講師派遣がある。今後、市町村で１つの中学校だけというところが増えることが予想される。その１つの中学校は図書館化（市民が集える場）にならないのか。市町村内の中学生全員が来ているので、そこでモデル的に何かできるといいと考えている。 ○大学としても、例えば、中央の図書館に通えない子どもたちが、中学校で図書館を活用できるようにすることなどを含めて、その地域の特質に合わせた中学校の支援ができないかと考えている。そういうモデル実践ができるとよい。
委　員	○研修後の変容をどうとらえているか。研修を受けても変容が見られないこともある。 ○高齢者向けの認知症予防対策として図書館利用を行っているが、図書館関係者の参加が見られない。この取組を広げるのであれば、図書館の専門性がほしい。社会福祉協議会と図書館というような組み合わせがイメージできると、もっと広がりがあるのではないか。 ○ある学校の図書室を福祉的な視点で、障害のある方でも高齢者でも活用できる学校図書室として開いてくれないかと相談している。そこに図書館機能プラス地域づくりの機能も入ってきて、新しい取組ではないかと思う。
委員長	○県の教育研修センターは、研修の満足度評価を行っている。評価項目の中に、その後実践をしたのかの項目をとっているので、アウトプットやインパクトに関する評価のデータをもっている。 ○細島小学校は、社会教育施設と一体化した小学校へリニューアルする。日向市の新たなモデルであるが、そういったところに読書の要素を取り入れられないか。そういった場に読書の専門家や読書の熱量を持っている人がいかに参入していくか。

委　員	○学校で先生達が図書館を活用した授業を行っていることは、人材育成の結果ではないか。やれていること自体はすごい。
委　員	○研修では、いろいろなところでつながりがある。 ○学校図書館運営には、管理職の理解が必要だと感じる。管理職の研修の中に、図書館の研修も入れてほしい。管理職が図書館に足を運んでくれると、取組が見えて、他の先生方にも広がっていく。人が入れ替わったときに、ノウハウもつなげられる。学年主任と図書主任というような、業務過多な兼務がなくなり、負担も軽減されるのではないか。
委　員	○業務分担として、学校以外と組むのはどうか。
委　員	○読み聞かせボランティアとの連携はある。
事務局	○図書館フォーラムについて、我々の問題意識は、学校関係者、図書館関係者などがそれぞれの大会を行っており、他の関係者同士の繋がりがないところにある。そのため、義務教育、高校教育、大学、市町村立図書館を含めたシンポジウムを開催したいと考えている。そこには、読書のボランティアの方にも参加してもらう。そして、いろんなところとの繋がりのきっかけになる大会に図書館フォーラムをリニューアルしたい。 ○シンポジウムを通して、繋がりたい人の話を聞いたり、話し合ったりできる大会にするため、３年後の開催をめざしてしっかり準備を進めていく。
委　員	○６月、１２月に行われた現物選書には、公立の図書館職員だけではなく、学校図書館関係者も参加し、１２月の方では合同のワークショップを行った。同じ地域の公共図書館職員と学校の先生がフェイストゥーフェイスで研修する場になった。このような取組を増やしていくことが大切だと考える。
環境整備	
委　員	○宮崎県生涯読書活動推進計画はもっと広く県民に周知することが必要だと思う。そのためにも、宮崎県生涯読書活動推進計画の名前をもっと柔らかくして、ニックネーム、ブランド名を作ってはどうか。高校生ビブリオバトルや図書館フォーラムも推進計画の一環として行われているということが分かるようになると、県民に浸透するのではないか。 ○ネットの活用を考えてみてはどうか。みやざき学び応援ネットにも県読書活動推進計画のサイトを作り、県民がアクセスできるようにするとよい。その中で、「大切なあなたへ送る　私の一冊」で応募があった作文も公表して良いのではないか。サイトを作ることができれば、参加型のサイトとして、何か書き込めるコンテンツがあるとよい。

委　員	○図書セットの貸出については、大活字本も含まれていて、地域の高齢者方にも喜ばれている。 ○公立の学校や幼稚園は教育長とつながっている。教育長の研修の中に、図書館の内容を入れるなどして、教育長の理解を得ることも必要である。 ○市町村立図書館などの自治体間の連携を深め、効率的な図書館運営ができればよいと考えている。
委　員	○管理職の理解の有無は大変重要である。学校図書館の館長は校長であることを認識してもらえるように、学校図書館長に任命するといった辞令を出してはどうか。 ○図書館教育を管理職の研修は必須すると、学校図書館が変わっていくと思う。
委　員	○学校司書エリアコーディネーターの事業は、学校図書館の大きな変容につながった。 ○管理職や図書主任の意識や意欲によって、せっかくの事業が活かされないこともある。小・中学校と高校との連携の大切さを理解してもらえるように、いろんな声をあげていきたい。
委　員	○平成１９年に学校図書館の九州大会が宮崎であった。大会を通して、いろんな方々や団体とつながることができ、大変盛り上がった。当時の事務局の校長先生にも自ら動いていただいた。 ○大きなイベントは人を動かす。シンポジウムもぜひがんばってもらいたい。 ○３・４年後に学校図書館の九州大会が再び宮崎で行われる。その際は、県教育委員会にも、より多くのサポートをもらいたい。
委　員	○読書活動推進リーダーの配置校はどのように決定しているのか。 ○加配された学校は、学校図書館の整備につながると思う。２年間の事業が終わった後に、どのように継続するかが大切だと考える。学校や先生のやる気、学校図書館を盛り上げようという思いを持っている学校を選んでいくとよいのではないか。
事務局	○市町村ができることと、県ができることがあり、県ができることは、この学校に、こんなシステムを入れたら、きっと花開くだろうと考えることが県の立場である。市町村は、加配を受けて、２～３年間の研究をした後、その成果をどう活かしていくかを考えることが市町村の立場である。 ○市町村教育委員会が事業後に、どう活かしていくか、そこを県も一緒になって考えていくことが、県と市町村との連携にもつながっていく。
全体を通して・その他	
委　員	○今、高齢者が多い地域が大多数を占める。そのため、政策の中でも高齢者を支える制度が傾いてきており、今のままでは維持できない。そう考えた時に、地域に高齢者の居場所づくりを地域住民が担っていく必要がある。 ○日向市では、高齢者が身体的な機能を落とさないように、体操などの取組をしている。一方で、脳を鍛えることも必要であるため、本を読むことでトレーニングさせたい。パソコンから申し込んだら本が送られてくるしくみがある地区

	がある。そんな活用も可能か。
委　員	○県立図書館のマイラインは、遠隔地の県民のため、市町村図書立図書館とつながっている。
委員長	○五ヶ瀬町では、マルシェに届けている事例もある。図書館のアウトリーチ活動と組み合わせると可能ではないか。
委　員	○小林市立図書館では高齢者施設を回り、こんな本がほしいという要望があればお届けしている。地元の図書館に相談すれば、精一杯応えてくれると思う。
委　員	○日向市では、地域の活動が班単位にすると、８０くらいある。プラスワンで「読む」という活動が入ってくると、頭のトレーニングにもなると思う。 ○高校生が、高齢者の社会的な活動にチャレンジしたいという話があり、それが高校生の読み聞かせだった。悪い取組ではないが、一方通行な取組である。高齢者側の要望もあるということを先生に話した。本を媒体にしたプラスワンの活動ができないかと思う。本を一つの媒体として、いろんなところをつないでいくことが大切だと考えている。
委　員	○県立図書館では、高齢者を含めた音読教室を行っている。音読はまさに、高齢者の脳トレにつながっている。脳の老化を防ぎ、認知症予防にもなる。
委員長	○総合の探究の時間にいじめについて調べる高校生が、いじめの構造について書いている本といじめのプロセスについて書いている本を読み、読んだ上で何がしたいかを聞くが、答えられない。自分がいじめたり、いじめられたり、傍観者であったりする経験があれば、探究が進むが、当事者性がない限りは、探究できない。何を明らかにするかを考えれば、読むべき本が決まってくる。 ○それぞれの分野には専門家がいる。そういった人達が、図書館に参画してもらえると、もっと面白くなるのではないか。そうすると良書に出会える可能性も増える。読むべき本がきちんと見つかるような、そういった専門家が図書館にいるとよい。関心をもったときにレファレンスを使えることを知っているとよいが、知らなければ出会えない。本との出会いを演出できるとよい。